

「やりとり」は、共鳴、共振し合う関係

当 HP に記載した「高校卒業までに、自らの生命現象を考える機会を！（バックナンバー - 講義等関係（ ）P、2005.4.29：参照）」を目にしてくれた若者から、次のようなメールをいただいた。

【 HP の今日更新の「生命の重さ」について、私も最近よく考えます。

というのも、高校の先生と未だによく連絡を取り合うのですが、こないだ今後高校でボランティアをカリキュラムの一つとして取り扱うとのことでよい受け入れ先がないかどうか相談をされました。

もちろん、それによって生命について考える機会が与えられるとも思いますが、HP で言うようにそれ以前に知るべき生命の重さいうのもある気がします。

現状として、私の高校生時代にも平気でいわゆる健全な友達同士が、「身障！身障！」とってバカにし合っている様子を見て、心が痛んだ記憶があります。

特に中高では、教科を教える能力だけでなく、命の重さを伝えられる力も必要なことを強く感じます。

また、私もそんな教師を目指したいとも思います。 】

私は常々、音叉のように共鳴、共振し合う関係でこそ互いが育ち合うものと思うだけに、「共感」という言葉より「共鳴」、「共振」という言葉を好む。それだけに、こうして記事を目にして単に共感を抱いてくれるだけでなく、早速にメールをくださるといふ、感じたことを行動に移すことの出来る若者がいることは、何とも頼もしい！

こうした若者は、将来教壇に立っても、生徒たちとしっかりと「(共鳴し合う)やりとり」が出来る教育活動をしてくれるものと思う。

( 2005 年 4 月 30 日 記 )